解答解説

2024後期・社福国試対策

ソーシャルワークの理論と方法(70～78＋④)、社会福祉調査の基礎(79～84＋②)

70 ソーシャルワークに影響を与えたシステム理論に関する次の記述のうち，適切なものを1つ選びなさい。

1．システムはお互いに影響を及ぼし合うため，境界は存在しない。

2．閉鎖システムは，ミクロレベルで存在する。

3．事象を原子や分子などの構成要素に還元し，その要素を詳細にみることによって事象を理解できるという見方を基盤としている。

4．システムには階層性があり，システムの中にサブシステムが存在する。

5．システムの総和は，各要素を積算したものに等しい。

【正答】4

1．適切でない。システムは何らかの境界をもつ。（『新・社会福祉士養成講座⑦相談援助の理論と方法Ⅰ 第3版』中央法規出版（2015年）P58参照）

2．適切でない。閉鎖システムは外部とのやり取りがない形で存続しているシステムであり，理論上のものである。（『新・社会福祉士養成講座⑦相談援助の理論と方法Ⅰ 第3版』中央法規出版（2015年）P58参照）

3．適切でない。システム理論は，事象を要素に還元し，その要素を詳細に見ることによって事象を理解できるとする要素還元主義的な考え方を批判したものである。（『新・社会福祉士養成講座⑦相談援助の理論と方法Ⅰ 第3版』中央法規出版（2015年）P59参照）

4．適切。（『新・社会福祉士養成講座⑦相談援助の理論と方法Ⅰ 第3版』中央法規出版（2015年）P58参照）

5．適切でない。システムでは，システムの構成要素の属性を足し上げることに加えて，構成要素間の相互作用を積算する。システムの総和は構成要素を積算したもの以上になる。（『新・社会福祉士養成講座⑦相談援助の理論と方法Ⅰ 第3版』中央法規出版（2015年）P59参照）

71 ソーシャルワークの展開過程に関する次の記述のうち，最も適切なものを1つ選びなさい。

1．プランニングでは，支援やサービス提供が的確に進んでいるか，クライエントの取り組みがどのように進んでいるかを確認する。

2．インテークでは，アセスメントを再度実施し，援助プランの強化や新たな援助プランの立案を行う。

3．ターミネーションでは，援助目的に向かって援助計画が立てられる。

4．アセスメントでは，いかに問題に介入するかを見つけ出すことを目的に，情報を収集，統合し，分析をして最適の解決法を探ろうとする。

5．モニタリングでは，ソーシャルワーカーがどのような援助ができるかをクライエントに伝える。

【正答】4

1．適切でない。モニタリングの説明である。（『新・社会福祉士養成講座⑦相談援助の理論と方法Ⅰ 第3版』中央法規出版（2015年）P138参照）

2．適切でない。再アセスメントの説明である。（『新・社会福祉士養成講座⑦相談援助の理論と方法Ⅰ 第3版』中央法規出版（2015年）P235参照）

3．適切でない。プランニングの説明である。（『新・社会福祉士養成講座⑦相談援助の理論と方法Ⅰ 第3版』中央法規出版（2015年）P127参照）

4．適切。アセスメントとは，収集された情報全体をみて，何を，どのようにとらえるか・評価するかということである。（『新・社会福祉士養成講座⑦相談援助の理論と方法Ⅰ 第3版』中央法規出版（2015年）P122，181参照）

5．適切でない。インテークの説明である。（『新・社会福祉士養成講座⑦相談援助の理論と方法Ⅰ 第3版』中央法規出版（2015年）P107参照）

12 ソーシャルワークの評価方法の一つである単一事例実験計画法に関する次の記述のうち，正しいものを1つ選びなさい。

1．ケース終結後に繰り返して観察・測定を行う。

2．援助プログラムを実施する前のインターベンション期と開始後のベースライン期のデータを比較する。

3．独立変数以外の説明要因を排除できるため，独立変数と従属変数の間の因果関係を説明する上で説得力のある評価方法と言える。

4．課題を抱えた集団を，実験群と統制群の二つの軍に分ける。

5．クライエントを援助する過程で用い，効果に関する情報をケース援助に直接フィードバックすることができる。

【正答】5

1．誤り。ベースライン期には援助を実施せずに観察だけを行い，援助を実施するインターベンション期においても観察を繰り返す。（『新・社会福祉士養成講座⑦相談援助の理論と方法Ⅰ 第3版』中央法規出版（2015年）P243参照）

2．誤り。援助プログラムを実施する前のベースライン期と開始後のインターベンション期のデータを比較する。（『新・社会福祉士養成講座⑦相談援助の理論と方法Ⅰ 第3版』中央法規出版（2015年）P243参照）

3．誤り。単一事例実験計画法では，独立変数（援助プログラム）以外の説明要因を排除する仕組みがない。無作為分配がなされていないため，因果関係を完全には説得できない。（『新・社会福祉士養成講座⑦相談援助の理論と方法Ⅰ 第3版』中央法規出版（2015年）P244参照）

4．誤り。集団比較実験計画法の説明である。集団比較実験計画法では，無作為分配により，プログラムの提供を受ける群（実験群）とプログラムを受けない群（統制群）の二つの群に分ける。（『新・社会福祉士養成講座⑦相談援助の理論と方法Ⅰ 第3版』中央法規出版（2015年）P241参照）

5．正しい。一つのケース（個人や家族）だけで効果測定を行うことから，目の前のクライエントを援助する過程で用いることができる。（『新・社会福祉士養成講座⑦相談援助の理論と方法Ⅰ 第3版』中央法規出版（2015年）P243参照）

73　アセスメントに関する次の記述のうち，適切なものを2つ選びなさい。

1．クライエント本人からの情報収集のみによって成り立つ。

2．クライエントの話を丁寧に聴くために，アセスメントシートに記載された質問内容を順番に一つずつたずねていく。

3．アセスメントの起源は，リッチモンド（Richmond,M.）の『社会診断』に遡ることができる。

4．アセスメントで得られた情報を組織化することが重要である。

5．プランニングを進めた後に取り組む。

【正答】3;4

1．適切でない。クライエント本人のみならず，必要であれば本人の同意を得て，必要な関係医機関や関係者から情報を得る。（『新・社会福祉士養成講座⑦相談援助の理論と方法Ⅰ　第3版』中央法規出版（2015年）P189参照）

2．適切でない。クライエントの話の流れに沿って，その流れの中で必要な情報を明らかにしていく。（『新・社会福祉士養成講座⑦相談援助の理論と方法Ⅰ　第3版』中央法規出版（2015年）P189参照）

3．適切。リッチモンドは，社会診断を「クライエントの社会的状況とパーソナリティをできる限り正確に定義する試み」とした。（『新・社会福祉士養成講座⑦相談援助の理論と方法Ⅰ　第3版』中央法規出版（2015年）P183参照）

4．適切。得られた情報がどう問題解決に結び付けられるのかを考える情報の組織化が不可欠である。（『新・社会福祉士養成講座⑦相談援助の理論と方法Ⅰ　第3版』中央法規出版（2015年）P201参照）

5．適切でない。アセスメント結果を踏まえて，プランニングを行う。（『新・社会福祉士養成講座⑦相談援助の理論と方法Ⅰ　第3版』中央法規出版（2015年）P98参照）

74 実践モデルに関する次の記述のうち，最も適切なものを1つ選びなさい。

1．ライフモデルは，問題とその問題を引き起こしている原因の直接的因果関係を重視する。

2．ストレングスモデルは，ポストモダニズムの潮流から登場した。

3．医学モデルでは，生活課題は人と環境の交互作用の中で生じると捉える。

4．ストレングスモデルでは，個人よりも地域のストレングスに着目する。

5．医学モデルは，一般システム理論と生態学理論のプラスの側面を取り込んで発展した。

【正答】2

1．適切でない。問題とその原因を起こしている原因の直接的因果関係を重視するのは，医学（治療）モデルである。（『新・社会福祉士養成講座⑧相談援助の理論と方法Ⅱ 第3版』中央法規出版（2015年）P138参照）

2．適切。ストレングスモデルは，科学性・実証性を重視するモダニズムに対抗して登場したポストモダニズムの潮流のなかで台頭してきた。（『新・社会福祉士養成講座⑧相談援助の理論と方法Ⅱ 第3版』中央法規出版（2015年）P141参照）

3．適切でない。ライフモデルの説明である。（『新・社会福祉士養成講座⑧相談援助の理論と方法Ⅱ 第3版』中央法規出版（2015年）P139，140参照）

4．適切でない。ストレングスモデルは，支援対象の強さや能力に焦点を当てようとするモデルであり，個人のみならず，グループや地域社会の強さにも着目する。個人よりも地域のストレングスにより着目するものでもない。（『新・社会福祉士養成講座⑧相談援助の理論と方法Ⅱ 第3版』中央法規出版（2015年）P141参照）

5．適切でない。ライフモデルの説明である。（『新・社会福祉士養成講座⑧相談援助の理論と方法Ⅱ 第3版』中央法規出版（2015年）P139，140参照）

75 問題解決アプローチに関する次の記述のうち，適切なものを1つ選びなさい。

1．診断学派のホリス（Hollis,F.）によって提唱された。

2．役割理論の成果を取り入れた。

3．ソーシャルワーカーの能力であるワーカビリティを活用することを重視した。

4．女性のエンパワメントと社会変革の双方を支援の焦点とすることを特徴とする。

5．社会構成主義の考え方を基盤とする。

【正答】2

1．適切でない。ホリス（Hollis,F.）は心理社会的アプローチを提唱した。（『新・社会福祉士養成講座⑧相談援助の理論と方法Ⅱ 第3版』中央法規出版（2015年）P150参照）

2．適切。教育学者デューイの知見や自我心理学，役割遂行理論の成果を摂取し，アプローチとして発展させた。（『新・社会福祉士養成講座⑧相談援助の理論と方法Ⅱ 第3版』中央法規出版（2015年）P156参照）

3．適切でない。クライエントが支援を自分にとって有効なものとするかどうかにかかる応答能力をワーカビリティとし，クライエントのワーカビリティを高め，彼らが主体的に問題解決できるように支援することを目指す。（『新・社会福祉士養成講座⑧相談援助の理論と方法Ⅱ 第3版』中央法規出版（2015年）P156参照）

4．適切でない。フェミニストアプローチの説明である。（『新・社会福祉士養成講座⑧相談援助の理論と方法Ⅱ 第3版』中央法規出版（2015年）P188参照）

5．適切でない。ナラティブアプローチの説明である。（『新・社会福祉士養成講座⑧相談援助の理論と方法Ⅱ 第3版』中央法規出版（2015年）P178参照）

76 次の事例を読んで，Y福祉活動専門員（社会福祉士）が介入しようとしているレベルとして，最も適切なものを1つ選びなさい。

〔事 例〕

T災害公営住宅は震災後に建設された。様々な地域から未知の土地であるT災害公営住宅に転居してきた入居者は，町内会や棟のイベントなどの機会を活用しながら，住民同士のつながりを獲得してきた。震災後数年経過したある日，Y福祉活動専門員は，T災害公営住宅に住むUさん（82歳，男性）から相談を受けた。コロナ禍以降集まる機会が減少しており，また棟の住人が転出して住む人が変化してきたことから住民同士のつながりが減少していることが不安だと言う。Y福祉活動専門員は町内会とともに実態把握と今後の対応の検討を行うこととした。

1．ミクロレベル

2．メゾレベル

3．エクソレベル

4．クロノレベル

5．マクロレベル

【正答】2

1．適切でない。ミクロレベルは，個人・家族やその個人を含む小集団の最小のシステムを指す。（『新・社会福祉士養成講座⑦相談援助の理論と方法Ⅰ 第3版』中央法規出版（2015年）P70参照）

2．適切。メゾレベルにおけるソーシャルワークは，ミクロレベルで支援を行う個人・家族や小集団が所属する組織・団体のほか，居住・活動する場所である地域において展開される。（『新・社会福祉士養成講座⑦相談援助の理論と方法Ⅰ 第3版』中央法規出版（2015年）P70参照）

3．適切でない。エクソレベルは，当事者を直接的に含まないが，その個人に重要な決定や強い影響力を与えるシステムを指す。（『最新・社会福祉士養成講座・精神保健福祉士養成講座⑫ソーシャルワークの理論と方法〔共通科目〕』中央法規出版（2021年）P17参照）

4．適切でない。クロノレベルは，社会歴史的な事象を含んだ周囲の出来事や本人の環境移行から構成されるものである。（『最新・社会福祉士養成講座・精神保健福祉士養成講座⑫ソーシャルワークの理論と方法〔共通科目〕』中央法規出版（2021年）P17参照）

5．適切でない。マクロレベルは，ソーシャルワークにおいては一番大きなレベルで，マクロレベルのソーシャルワークの具体例としては，国の政策立案や法律改正，慣習や人々の意識の変化への働きかけなどが挙げられる。（『新・社会福祉士養成講座⑦相談援助の理論と方法Ⅰ 第3版』中央法規出版（2015年）P70参照）

77 相談援助における面接に関する次の記述のうち，適切なものを2つ選びなさい。

1．目的を明確化し，何らかの筋道に沿って面接手段等をある程度設定して行う面接を非構造化面接という。

2．生活場面面接は，クライエントがよりリラックスして臨むことができるという利点がある。

3．クライエントが十分話すことができるように，面接の時間は設定しない。

4．居宅での面接では，クライエントがほかの家族に気兼ねをしたりクライエントの秘密が守られないことがある。

5．通常の会話と比較すると，面接では明確な役割や責務が存在しない。

【正答】2;4

1．適切でない。構造化面接の説明である。（『新・社会福祉士養成講座⑦相談援助の理論と方法Ⅰ 第3版』中央法規出版（2015年）P267参照）

2．適切。クライエントが生活する場で行う生活場面面接では，クライエントが慣れた環境で緊張せずに面接に臨むことができる。（『新・社会福祉士養成講座⑦相談援助の理論と方法Ⅰ 第3版』中央法規出版（2015年）P267参照）

3．適切でない。面接の内容やクライエントの状況にもよるが，クライエントとワーカーの集中力を持続させながら一定の面接の目的を達成するために必要な面接時間を設定する。時間制限があることで，面接時間が有効に活用されることもある。（『新・社会福祉士養成講座⑦相談援助の理論と方法Ⅰ 第3版』中央法規出版（2015年）P266参照）

4．適切。居宅での面接では，家族から情報を得られる一方，クライエントの秘密が家族に伝わったり，クライエントが家族に気兼ねをして面接内容が深まりにくい場合もある。（『新・社会福祉士養成講座⑦相談援助の理論と方法Ⅰ 第3版』中央法規出版（2015年）P268参照）

5．適切でない。面接では，ソーシャルワーカーは意図的にクライエントに働きかけ，面接の目的を達成する責務がある。（『新・社会福祉士養成講座⑦相談援助の理論と方法Ⅰ 第3版』中央法規出版（2015年）P253参照）

78 エンパワメントアプローチに関する次の記述のうち，適切なものを2つ選びなさい。

1．抑圧状況を作り出している構造要因を変革することにも焦点を当てる。

2．モダニズムの潮流の中で発展してきた。

3．クライエントとのパターナリスティックな関係を基盤とする。

4．ホワイト（White,M.）とエプストン（Epston,D.）が家族療法の実践を基盤に発展させた。

5．何らかの理由によりパワーレスな状態に置かれている人の抱えている課題を対象とする。

【正答】1;5

1．適切。クライエントが自らの抑圧状況を認識して能力を高めて対処できるようにしていくことと，抑圧状況を作り出している構造要因を変革することの両者に焦点を当てる。（『新・社会福祉士養成講座⑧相談援助の理論と方法Ⅱ 第3版』中央法規出版（2015年）P175参照）

2．適切でない。エンパワメントアプローチは，実証主義に代表されるモダニズムのパラダイムを否定するポストモダニズムの潮流の中で発展してきた。（『新・社会福祉士養成講座⑧相談援助の理論と方法Ⅱ 第3版』中央法規出版（2015年）P174参照）

3．適切でない。エンパワメントアプローチでは，クライエントとのパートナーシップを基盤に実践する。（『新・社会福祉士養成講座⑧相談援助の理論と方法Ⅱ 第3版』中央法規出版（2015年）P175参照）

4．適切でない。ナラティブアプローチの説明である。（『新・社会福祉士養成講座⑧相談援助の理論と方法Ⅱ 第3版』中央法規出版（2015年）P178参照）

5．適切。対象となるのは，加齢や疾病・障害，出自や人種，貧困，性や性的指向など，社会的マイノリティであることを理由に抑圧され，社会的弱者としてパワーレスな状態におかれている人々である。（『新・社会福祉士養成講座⑧相談援助の理論と方法Ⅱ 第3版』中央法規出版（2015年）P175参照）

⑫ 事例を読んで，地域包括支援センターのM社会福祉士の対応に関する次の記述のうち，最も適切なものを1つ選びなさい。

〔事 例〕

Jさん（81歳，女性）は，転倒して骨折したために入院治療を行っていたが，リハビリテーションを行い杖歩行が可能となったため退院を促されている。しかしJさんはエレベーターのない団地の5階に住んでいることを理由に，まだ退院できないと看護師に訴えていた。入院前にしばしばJさん宅を訪問していて関わりのあったM社会福祉士は，病院から連絡をもらってJさんの病室を訪れたところ，「みんなで私を追い出そうとしているの。こんな状態ではまだ退院できないと言っているのに。」と言って泣き出した。

1．Jさんの希望通りに，退院しない方向で調整することを説明する。

2．病院の職員が追い出そうとしていると考えるのは誤解であることを毅然とした態度で伝える。

3．杖歩行が可能となったので退院するように説得する。

4．退院できないと考えている理由について教えてほしいと話しかける。

5．老人保健施設の入所の申し込みをしたことを伝えて，安心してもらう。

【正答】4

1．適切でない。Jさんの状況とJさんが退院できないと話す背景について見極めて対応する必要がある。（『新・社会福祉士養成講座⑦相談援助の理論と方法Ⅰ 第3版』中央法規出版（2015年）P259参照）

2．適切でない。Jさんが不安を訴えたことに対して共感的に対応しておらず，適切でない。（『新・社会福祉士養成講座⑦相談援助の理論と方法Ⅰ 第3版』中央法規出版（2015年）P259参照）

3．適切でない。Jさんが不安を訴えたことを受容せず，一方的な対応であり，適切でない。（『新・社会福祉士養成講座⑦相談援助の理論と方法Ⅰ 第3版』中央法規出版（2015年）P259参照）

4．適切。Jさんが退院できないと話す背景や状況について聞き，今後の対応を検討していく必要がある。（『新・社会福祉士養成講座⑦相談援助の理論と方法Ⅰ 第3版』中央法規出版（2015年）P259参照）

5．適切でない。老人保健施設の入所について，Jさんからの希望は見当たらないし必要性は読み取れないので，適切ではない。

② ケアマネジメント（ケースマネジメント）に関する次の記述のうち，最も適切なものを1つ選びなさい。

1．ケアプランの内容は，口頭で合意を得る。

2．スクリーニングでは，ケアマネジメントの対象者に該当するかどうかを確認し，同時にクライエントの緊急度を捉える。

3．我が国においては，高齢者分野に限定して用いられている。

4．クライエントがどの程度経済的な負担ができるかよりも，クライエントの希望を優先してケアプランを作成する。

5．ケアプランの目標は，達成しやすいように抽象的なものとする。

【正答】2

1．適切でない。作成されたケアプランに対して，クライエントやその代理人から同意を得るためには，口頭ではなく，文書により合意を得る。なぜなら，クライエントにとっては自己負担額が伴う者であり，またケアプランが文書化されることによって，どのサービスがどのような生活ニーズに対処するために実施されるかが明らかになるためである。（『新・社会福祉士養成講座⑧相談援助の理論と方法Ⅱ 第3版』中央法規出版（2015年）P48参照）

2．適切。スクリーニングは，ケースマネジメントの過程の最初の段階である，①ケースの発見，②スクリーニング，③インテークの3つの業務の1つとして位置づけられている。（『新・社会福祉士養成講座⑧相談援助の理論と方法Ⅱ 第3版』中央法規出版（2015年）P33，34参照）

3．適切でない。日本では，2000年から施行された介護保険制度においてケースマネジメントが本格的に実施されることになり，障害者に対するケースマネジメントは2005年に成立した障害者自立支援法のもとで始まった。（『新・社会福祉士養成講座⑧相談援助の理論と方法Ⅱ 第3版』中央法規出版（2015年）P28参照）

4．適切でない。ケアプランは，クライエントないしは家族の負担額を意識して作成する必要がある。どの程度の経済的な負担が可能なのかを確認しながら，クライエントや家族の同意を得ながらケアプランを作成していく。（『新・社会福祉士養成講座⑧相談援助の理論と方法Ⅱ 第3版』中央法規出版（2015年）P48参照）

5．適切でない。ケアプランの目標は，できる限り可視的で具体的な目標を定めることが望ましい。そのような目標であれば，クライエントもサービス提供者も，明確な目標に向かって活動することができる。（『新・社会福祉士養成講座⑧相談援助の理論と方法Ⅱ 第3版』中央法規出版（2015年）P49参照）

③ 記録の文体に関する次の記述のうち，適切なものを1つ選びなさい。

1．ジェノグラムを活用することによって，クライエントを取り巻く状況を視覚化できる。

2．エコマップをクライエントと作成することで，クライエント自身が自分の置かれている状況に気づき，その気づきを問題解決に結び付けることができる。

3．フェイスシートには，面接中の会話や行動のやりとりを，一語一語忠実に記録する。

4．逐語記録はクライエントとのやりとりを分析することができるため，日々の記録に適している。

5．IT機器を使った記録は，データの漏えいや記録の改ざんの危険性があるため，禁止されている。

【正答】2

1．適切でない。エコマップの説明である。（『新・社会福祉士養成講座⑦相談援助の理論と方法Ⅰ 第3版』中央法規出版（2015年）P196参照）

2．適切。エコマップは，アセスメントのツールであると同時に，治療的な役割も持つ。（『新・社会福祉士養成講座⑦相談援助の理論と方法Ⅰ 第3版』中央法規出版（2015年）P196参照）

3．適切でない。逐語記録の説明である。フェイスシートには，クライエントの基本的な属性をまとめる。（『新・社会福祉士養成講座⑦相談援助の理論と方法Ⅰ 第3版』中央法規出版（2015年）P285参照）

4．適切でない。逐語記録は会話や行動を含むやり取りを一語一語記録するものであるため，膨大な時間と労力がかかり，日々の支援活動の記録には適さない。教育や研究のツールとして有効である。（『新・社会福祉士養成講座⑦相談援助の理論と方法Ⅰ 第3版』中央法規出版（2015年）P285参照）

5．適切でない。最近では記録のデジタル化が進んでいる。セキュリティの強化や職員のITリテラシーの向上が課題である。（『新・社会福祉士養成講座⑦相談援助の理論と方法Ⅰ 第3版』中央法規出版（2015年）P286参照）

④ グループワークに関する次の記述のうち，最も適切なものを1つ選びなさい。

1．グループメンバーは同じ共通課題を抱えているため，その背景にある事情も共通している。

2．グループメンバーが主体的に参加できるようなプログラムを計画する。

3．グループ内で対立が生じた場合は，メンバー同士の関係を維持できなくなるため，グループを解散する。

4．グループワークは，プログラム活動でよりよい結果を生み出すことを目的に実施される。

5．メンバーが自由に参加できるように，グループワーク内の規則は設けない。

【正答】2

1．適切でない。同じグループワークに参加するメンバーは，共通の生活課題を抱えているが，その背景は様々である。共通課題を抱えながらも，それぞれ異なった背景や事情をもっていることを認識し，メンバー同士も同質性と異質性を理解していくことができるように支援していく。（個別化の原則）（『新・社会福祉士養成講座⑧相談援助の理論と方法Ⅱ 第3版』中央法規出版（2015年）P65参照）

2．適切。グループワークは，メンバーが参加することでメンバー同士の仲間意識が高まり，相互作用が生まれる。メンバーが積極的・主体的に参加していくために，メンバーの最大限の参加と相互作用の促進がなされるプログラムを計画する必要がある。（参加の原則）（『新・社会福祉士養成講座⑧相談援助の理論と方法Ⅱ 第3版』中央法規出版（2015年）P65参照）

3．適切でない。グループ活動において，つまずきや行き詰まりが生じることがある。メンバー同士の対立・緊張・不安等の葛藤に対して，メンバー同士の協力によって解決したり，緩和することでグループやメンバーが成長する機会ともなる。（葛藤解決の原則）（『新・社会福祉士養成講座⑧相談援助の理論と方法Ⅱ 第3版』中央法規出版（2015年）P65参照）

4．適切でない。プログラムは，グループがグループ目標達成のために展開していく全過程のことであり，具体的な活動や行事をプログラム活動という。プログラム活動は，グループワークの目標達成のための手段である。（『新・社会福祉士養成講座⑧相談援助の理論と方法Ⅱ 第3版』中央法規出版（2015年）P64参照）

5．適切でない。グループの目標を達成していくためには，グループ運営上のルールを設ける。メンバー全てを尊重しそれぞれの個性を発揮してもらうため，またグループとしての成長や発展をもたらすため，状況に応じて注意し合うなど一定の制約を加える。（制限の原則）（『新・社会福祉士養成講座⑧相談援助の理論と方法Ⅱ 第3版』中央法規出版（2015年）P66参照）

79 量的データについて述べた文のうち，適切なものを2つ選びなさい。

1．中央値と平均値は近似的にあることが多い。

2．標準偏差の値が小さいほど，分布の広がりが大きい。

3．分散の値が大きいほど，分布の広がりが大きい。

4．歪度は，分布の左右対称性を確認する指標である。

5．第1四分位とは，昇順データを大きい方から1/4の値を指す。

【正答】3;4

1．適切でない。中央値は，データを大小順に並べたときに，ちょうど真ん中に位置する値である。データが偶数個の場合は真ん中に位置する2つの値の平均値。平均値はデータの合計をその個数で割ったものである。中央値は，平均値に比べ，はずれ値や分布の歪みから影響を受けにくい。（『社会福祉士シリーズ5社会調査の基礎 第3版』弘文堂（2018年）P64～67，216，218参照）

2．適切でない。標準偏差の値が小さいほど，分布の広がりが小さい。（『社会福祉士シリーズ5社会調査の基礎 第3版』弘文堂（2018年）P64～67参照）

3．適切。分散も標準偏差も，値の大きさが大きいほど分布の広がりが大きい。（『社会福祉士シリーズ5社会調査の基礎 第3版』弘文堂（2018年）P64～67参照）

4．適切。（『社会福祉士シリーズ5社会調査の基礎 第3版』弘文堂（2018年）P64～67参照）

5．適切でない。小さい方から1/4である。また，第1四分位と第3四分位の間を四分位範囲という。（『社会福祉士シリーズ5社会調査の基礎 第3版』弘文堂（2018年）P64～67参照）

80 調査方法について述べた文のうち，最も適切なものを1つ選びなさい。

1．参与観察法では，調査者は調査対象者に観察されている意識を与えないように，調査対象者から見えないようにすることが望ましい。

2．社会調査は理論的に設計されているものであるから，調査者の問題設定から外れるような情報は分析の対象にしない方が良い。

3．インタビュー調査の場合，調査の内容を深めるために，現場で臨機応変に，質問項目を付け加えることも必要である。

4．社会調査は理論的に設計されているものであるから，観察対象を取り巻く環境を統制して行うことが望ましい。

5．インタビュー調査は，調査者と調査対象者の間に，相互作用的関係が生じることが多いため，回答に制約が加わらないことが多い。

【正答】3

1．適切でない。参与観察法は，調査者の存在を調査対象者が認識している。（『社会福祉士シリーズ5社会調査の基礎 第3版』弘文堂（2018年）P7～8参照）

2．適切でない。参与観察法や非構造化面接や半構造化面接法は，想定外のことを臨機応変に組み込んでいくことが望ましい。（『社会福祉士シリーズ5社会調査の基礎 第3版』弘文堂（2018年）P7～8参照）

3．適切。参与観察法や非構造化面接や半構造化面接法は，想定外のことを臨機応変に組み込んでいくことが望ましい。（『社会福祉士シリーズ5社会調査の基礎 第3版』弘文堂（2018年）P7～8参照）

4．適切でない。統制的観察法の場合は設問文の通りであるが，自然的観察方法の場合は自然的状況の中で生起するものを観察するものであるから，そうではない。（『社会福祉士シリーズ5社会調査の基礎 第3版』弘文堂（2018年）P7～8参照）

5．適切でない。構造化面接法の場合，調査対象者の回答が，調査者が設定した枠組みに制約を受けることがことが多い。（『社会福祉士シリーズ5社会調査の基礎 第3版』弘文堂（2018年）P7～8参照）

81 アクション・リサーチについて述べた文のうち，最も適切なものを1つ選びなさい。

1．アクション・リサーチよりも参与観察法の方が，対象への関与が高い。

2．アクション・リサーチは事実追求の側面が強く，現場改革の視点は弱い。

3．アクション・リサーチは，外部の人間が参加して行うものではない。

4．アクション・リサーチにおいて用いることができる手法は限定されている。

5．アクション・リサーチの弱点の1つに，携わる個人の能力に限定されるという側面がある。

【正答】5

1．適切でない。アクション・リサーチの方が，対象への関与度は高い。（『社会福祉士シリーズ5社会調査の基礎 第3版』弘文堂（2018年）P100～101参照）

2．適切でない。現場の状況の改善のために行う側面が強い。（『社会福祉士シリーズ5社会調査の基礎 第3版』弘文堂（2018年）P100～101参照）

3．適切でない。外部の人間と共同で行うことも多い。（『社会福祉士シリーズ5社会調査の基礎 第3版』弘文堂（2018年）P100～101参照）

4．適切でない。手法として多くの手法を用いることができる。（『社会福祉士シリーズ5社会調査の基礎 第3版』弘文堂（2018年）P100～101参照）

5．適切。情報量の多さから，個人の能力の限界を超えてしまうことがある。（『社会福祉士シリーズ5社会調査の基礎 第3版』弘文堂（2018年）P100～101参照）

Q2 情報技術（IT）と社会調査について述べた文のうち，適切なものを2つ選びなさい。

1．質的調査で得られた質的データを量的に分析することを可能とした。

2．調査原票の保管には大きな役割を果たしていない。

3．オープン型のインターネット調査であれば，データの正確性を保証できる。

4．インターネット調査の場合，回収率を定義することは難しい。

5．標本数が大きくなれば，対象者の代表性を担保することができる。

【正答】1;4

1．適切。KH Corderなどのソフトの導入で可能になった。（『社会福祉士シリーズ5社会調査の基礎 第3版』弘文堂（2018年）P205参照）

2．適切でない。調査原票のPDFファイルへの変換等で使われている。（『社会福祉士シリーズ5社会調査の基礎 第3版』弘文堂（2018年）P204参照）

3．適切でない。クローズ型であっても，オープン型であっても，対象の代表性の問題はクリアできない。（『社会福祉士シリーズ5社会調査の基礎 第3版』弘文堂（2018年）P202参照）

4．適切。（『社会福祉士シリーズ5社会調査の基礎 第3版』弘文堂（2018年）P203参照）

5．適切でない。クローズ型であっても，オープン型であっても，対象の代表性の問題はクリアできない。（『社会福祉士シリーズ5社会調査の基礎 第3版』弘文堂（2018年）P202参照）

Q3 社会調査の倫理について述べた文のうち，適切なものを2つ選びなさい。

1．国勢調査は，統計法の規定により，「調査を受けない権利」は認められている。

2．調査データは，質的データであっても，匿名の形で扱われる必要がある。

3．調査データが匿名で扱われる場合，調査対象者にデータの取り扱いを説明する必要はない。

4．調査データとしての動画や画像は，個人が特定されないように処理する場合，許可を得なくて良い。

5．調査者には，調査を実施することによって生じるあらゆる事象について，責任を負う必要がある。

【正答】2;5

1．適切でない。「調査を受けない権利」は存在しているが，国勢調査は，統計法によって，回答の義務があるため，この権利は認められていない。（『社会福祉士シリーズ5社会調査の基礎 第3版』弘文堂（2018年）P22，統計法第13条参照）

2．適切。データの種類にかかわらず，匿名の形で扱う必要がある。（『社会福祉士シリーズ5社会調査の基礎 第3版』弘文堂（2018年）P22参照）

3．適切でない。データの種類にかかわらず，匿名の形で扱う必要がある。（『社会福祉士シリーズ5社会調査の基礎 第3版』弘文堂（2018年）P22参照）

4．適切でない。撮影や録音は許諾を得る必要がある。（『社会福祉士シリーズ5社会調査の基礎 第3版』弘文堂（2018年）P24参照）

5．適切。（『社会福祉士シリーズ5社会調査の基礎 第3版』弘文堂（2018年）P24参照）

84 質問紙調査に関する次の記述のうち，正しいものを1つ選びなさい。

1．自由回答の場合，調査対象者の「生の声」を活かすことが大切であるからカテゴリー化は避けた方が良い。

2．質問紙においては，一つの質問から社会的意識を測定するのは難しいので，評定尺度法を採用するのが一般的である。

3．二項選択法は無回答が少なくなるという特徴があるので，この方法を採ることが一般的である。

4．インパーソナルな質問とパーソナルな質問に対する回答は,同様の傾向になるため，ワーディングに注意する必要がある。

5．調査対象者は,質問紙のどのような質問に対しても肯定的な回答をする傾向があるので，ワーディングに注意する必要がある。

【正答】5

1．誤り。いくつかのカテゴリーに分類するコーディングと作業が必要になる。（『社会福祉士シリーズ5社会調査の基礎 第4版』弘文堂（2019年）P47～48，50～51参照）

2．誤り。設問によって，選択肢を変える必要がある。（『社会福祉士シリーズ5社会調査の基礎 第4版』弘文堂（2019年）P47～51参照）

3．誤り。二項選択肢は,どちらでもないという人が無回答になる可能性が高い（『社会福祉士シリーズ5社会調査の基礎 第4版』弘文堂（2019年）P48参照）

4．誤り。一般論であるインパーソナルな質問と個人的な質問であるパーソナルな質問では，異なる回答傾向になることが多い。（『社会福祉士シリーズ5社会調査の基礎 第4版』弘文堂（2019年）P53参照）

5．正しい。あらゆる質問に対しても肯定的な回答をする傾向があることをイエステンデンシーという。これを避けるためにワーディングに工夫する必要がある。（『社会福祉士シリーズ5社会調査の基礎 第4版』弘文堂（2019年）P53参照）

① 観察と面接に関する次の記述のうち，正しいものを1つ選びなさい。

1．アクティブ・インタビューでは,調査対象者が過去の経験や記憶を貯め込んでいる「容器」としてみる視点が強い。

2．参与観察においては，観察対象に直接参加しながら観察記録を取っていく方法であるから,調査者の主観が強くなる危険性がある。

3．事象見本法は，特定の行為にのみ焦点を当てて観察するため，時間のロスが少なく効率的な方法である。

4．グループインタビューは，人間関係が密な関係な集団に対して行うため，集団内の力学はあまり考慮しなくても良い。

5．面接は理論的に計算されたものでなくてはならないから,構造化された質問に基づいて行わなければならない。

【正答】2

1．誤り。調査対象者が過去の経験や記憶を貯め込んでいる「容器」としてみる視点が強いのは「伝統的インタビュー」である。（『社会福祉士シリーズ5社会調査の基礎 第4版』弘文堂（2019年）P103参照）

2．正しい。参与観察には観察対象に影響を与える実験者効果と共に調査者の主観が強くなるという方法的問題がある。（『社会福祉士シリーズ5社会調査の基礎 第4版』弘文堂（2019年）P93，98～99参照）

3．誤り。事象見本法は頻繁に生じない行為の場合，時間的経済性が弱くなる。（『社会福祉士シリーズ5社会調査の基礎 第4版』弘文堂（2019年）P97～98参照）

4．誤り。グループインタビューは集団力学を利用する特徴を有している。（『社会福祉士シリーズ5社会調査の基礎 第4版』弘文堂（2019年）P103～104参照）

5．誤り。構造化面接法もあるが，半構造化法や非構造化法もある。（『社会福祉士シリーズ5社会調査の基礎 第4版』弘文堂（2019年）P102～103参照）

② 統計法に関する次の記述のうち，正しいものを1つ選びなさい。

1．公的統計は，行政のための統計という位置づけを与えられている。

2．公的統計は，調査統計と業務統計から成り立っている。

3．統計法においては，総務大臣の指定による統計を一般統計としている。

4．公的統計は，施策実施のための基礎資料としてデータの有効利用を促進している。

5．統計委員会が専門的で中立公正な立場からの調査審議機関として位置づけられている。

【正答】5

1．誤り。行政法の改正によって，行政のための統計から社会の情報基盤としての統計に意味づけを変えた。（『社会福祉士シリーズ5社会調査の基礎 第4版』弘文堂（2019年）P9～10参照）

2．誤り。公的統計は調査統計と業務統計と加工統計からなっている。（『社会福祉士シリーズ5社会調査の基礎 第4版』弘文堂（2019年）P9～10参照）

3．誤り。総務大臣の指定による統計は指定統計である。（『社会福祉士シリーズ5社会調査の基礎 第4版』弘文堂（2019年）P9～10参照）

4．誤り。公的統計は，社会の情報基盤としての統計であるからデータの有効利用を促進している。（『社会福祉士シリーズ5社会調査の基礎 第4版』弘文堂（2019年）P9～10参照）

5．正しい。統計委員会は公的統計の「司令塔」的役割を果たしている。（『社会福祉士シリーズ5社会調査の基礎 第4版』弘文堂（2019年）P9～10参照）